

アジアの神学としての民衆神学の課題

——民族主義から脱植民地主義へ

かやま ひろこ
香山洋人

一、初めに

民衆神学は、軍事独裁政権下の大韓民国（以下、韓国と略称）という具体的な状況の中で生まれた一つの神学だ。しかも南米の「解放の神学」とは異なり、民衆神学は非キリスト教的文化伝統の中で形成された神学である。それは長い封建時代の後、西欧列強による開国の要求と国内の度重なる改革の試みと挫折、長年の宗主国清の後に来たのは新興帝国主義国日本による植民地支配であり、日本の敗戦はアメリカによる新たな支配の始まりとなり、それから半世紀以上、東西冷戦構造の代理苦ともいいうべき南北分断と軍事独裁政権、ようやく勝ち取られた民主

化も朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮と略称）との緊張と対立を解決するものではなく、今も続く植民地過去との痛みに満ちた対決と共にグローバル化の波に飲み込まれながらさまざまな価値が交錯する複雑な状況の中を生きる神学でもある。日本と朝鮮の関係はただ単に歴史や文化、宗教を共有しているというだけでなく、侵略や支配の歴史と共に、いまや政治的にも経済的にも切り離すのでできない濃密な関係にあることを忘れることはできない。

こうした振り返りによって明らかになるのは民衆神学が置かれている韓国の特殊事情ではない。それは、アジアにおけるさまざまな地域が経験した共通の体験、すなわち植民地支配と強いられた近代化という「原体験」であり、そこに重要なアクターとして日本とアメリカが関係してくることを含めた共通の何かといえるのではないだろうか。本稿は民衆神学という韓国固有の現代神学を考察することで、広くアジアの諸地域に共通する課題へと接近することを意図している。民衆神学がアメリカの保守的キリスト教による教権支配と、大日本帝国による植民地支配と、その後のアメリカを中心とした擬似帝國的支配、さらにはグローバリズムと呼ばれる世界資本の支配との闘いを担おうとする神学運動であるとすれば、その変遷の中に、アジアにおける脱植民地主義運動の宗教的側面を確かにとらえることが出来るはずだ。いままでも無くキリスト教はアジアやアフリカなどの諸地域において西欧キリスト教国家による植民地主義の尖兵としての役割を担ってきた。そのキリスト教がはたしてアジアにおける新植民地主義に対抗する力となりうるのか。この問いを考える上で民衆神学の歩みを検討することは一つの手がかりになるのではないかと思う。

このような問題意識から、まずは民衆神学の成り立ち

二、文脈化神学としての民衆神学

民衆神学が南米の解放の神学と並んで政治神学と呼ばれることには理由がある。第二次世界大戦終了直後、アメリカの支持によって誕生した李承晩（イ・スンマン）政権は、当時の冷戦構造の最前線である朝鮮半島において反共の砦として出発した。一方北朝鮮も、アメリカに対抗する共産圏の橋頭堡としてソ連や中国などの大国の後ろ盾を得て出発した。「奇跡」と吹聴された六〇年代の韓国の急激な経済成長は、朴正熙（パク・チョンヒ）軍事独裁政権による強圧的な政策実行を基礎に、多くの矛盾を抱えることでようやく可能となった偽りの繁栄であった。そのような中、一九六五年の日韓条約批准に対する反対運動は軍部関係者も加わる解放後最大規模の政

治的運動といえるのだが、異例ともいえる大同団結を可能としたものは日本に対する憤りと民族主義であり、反日の動機を除けば韓国内のさまざまな勢力が一つになって力を発揮することはできない状態だった。

韓国政府樹立以降キリスト教は反共イデオロギーとして国策的に保護を受けたこともあり、また農村から流入する労働者で膨れ上がった都市貧民の出現などの諸条件もあいまって急成長を遂げていた。一九七〇年、劣悪な労働現場の実態を訴える青年労働者全泰彦(チョン・テイル)の焼身事件を前後して、学生やキリスト教会による都市貧民問題への取り組みが開始される。その後徐々に具体化した労働運動の端緒を開いたのはこうしたキリスト教会の働きであった。⁽¹⁾ 民衆神学はこのような民衆運動とキリスト教との本格的な出会いの中から生まれた神学であった。

七〇年代に始まる労働者と学生の連帯は、「光州民衆抗争」を契機に八〇年代にはさらに広範な民主化闘争となり、九〇年を待たずして軍事独裁政権打倒という歴史的転換を実現させ、キリスト教が果たした役割も次第に

こうした理由からだ。

一九七〇年代に登場した民衆神学は、その後いくつかの両期を経てその姿を変えていくのだが、それらはすべて韓国社会の状況、韓国のキリスト教が置かれた状況の変化によるものだ。「民衆」とは民衆神学固有の神学用語として理解される必要がある。安炳茂(アン・ピョンム)にとって民衆は定義することで対象化してはならない存在だったが、徐南同(ソ・ナムドン)にとっての民衆は新約聖書でいうところの「罪人」であり、困窮者、被抑圧者、少数者、声を奪われたものの総称であったといていいだろう。その後「人民」、「市民」、「サバルタン」、「マルチチュード」などさまざまな概念をも射程に入れながら、それらの要素を含んだ概念を漠然と「民衆」という表現でまとめ上げることによって民衆神学は一つの学派を形成し今に至っている。

三、変遷する民衆神学

— 第一世代から第三世代まで —

民衆神学の変遷をたどることの意味は、アジアにおい

重要性を増していく。⁽²⁾ 軍事独裁政権との緊密な関係を維持しながら現状維持と親米反共イデオロギーとして機能した保守的キリスト教の一団があったことを考えれば、明確な政治的志向性によって民主化運動に参加した民衆神学が「政治神学」と呼ばれることはもつともなことといえるだろう。⁽³⁾

しかし民衆神学は西欧的キリスト教に対する批判を主眼とする「脱植民地主義神学」(postcolonial theology)として、あるいは自分たちの置かれた文脈と呼応しながら展開される「文脈化神学」(contextual theology)としての性格を持っている点に注目する必要がある。すべての神学はおのずと「文脈化」されている。⁽⁴⁾ これを民衆神学の立場に当てはめれば、すべての神学は本質的に「民衆神学」である。なぜなら民衆に無関心な神学はキリスト教神学に成りえないからである。⁽⁵⁾ 民衆神学は「民衆」を中心として文脈を読み解くことで、いわゆる「土着化神学」とは一線を画してきた。民衆神学が被抑圧者の解放をテーマとした解放の神学のひとつに数えられるのは

てキリスト教が自らの文脈とどのように切り結ぶのかを考察する作業の一例となるはずだ。そこでまず、民衆神学の主唱者であり後に「第一世代」と呼ばれる安炳茂と徐南同について、またその後の第二世代と第三世代について、またそこから照らし出される脱植民地主義神学の可能性について一瞥してみたい。⁽⁶⁾

(1) 西欧キリスト教批判と脱神学、第一世代 民衆神学

新約聖書学者であった安炳茂にとって聖書の主題は神やキリストではなく民衆であり、それは同時に民族との関係を抜きにしては語り得ない概念だった。⁽⁷⁾ 一九二二年、日本による植民地支配下に生まれ育った彼にとって民族主義は血肉の一部であり、そこから「民衆的民族」という主題が登場する。⁽⁸⁾ 安炳茂がテーマとした民衆と民族はすべての植民地支配体験者にとって避けて通ることのできない課題といえるだろう。一方、一九一八年生まれの徐南同も、自分は「血の中に韓国の伝統が流れている韓国人」であるという自覚のもと、自身のテーマは「聖書